

て、露のこりて霜となるほどの名なり、これをば霜をにざりていふべし、

〔冠辭考六〕つゆじものおきてし 万葉卷二に、石見より上る時、露霜乃置而之來者云々、こは

常あるつゞけ也、さて露じものを濁るべし、此反歌にもみぢばの散のまがひにとよみたれば、

秋ふけてなかなば霜を兼たる露をいふべき也、さらすば白露のおく霜のなともいひて、わづらは

しく露霜と重ねじかし、古今集に萩が花散らんをの、つゆじもにとよめるもまか也、

〔玉勝間十四〕萬葉集の露霜 萬葉集の歌に、露霜とよめる、卷々に多し、こは後の歌には、露と霜と

のこによめども、萬葉なるは、みなたゞ露のこと也、されば七の卷十の卷などには、詠露といへ

る歌によめり、多かる中には、露と霜と二つと見ても、聞ゆるやうなるもあれど、それもみな然に

はあらず、たゞ露也、これにさまゞ説あれども、皆あたらす、そもくたゞ露を、露霜といはむこ

とは、いかにぞや聞ゆめれども、此名によりて思ふに、志毛といふは、もとは露をもかねたる總名

にて、其中に氷らであるを、都由志毛といひ、省きて都由とのみもいへる也、そは都由は粒忌のよ

しにて忌とは清潔なるを云、雪の由も同じ、さればつゆじもとは、粒だちて清らなる志毛といふ

ことにぞ有ける、

〔物類稱呼天地〕霜之も 關西にて露霜なまだ霜の形なといふを、關東にて水霜みづしもといふを説有

略す、

〔萬葉集七〕雜歌詠露

烏玉之吾黑髮爾落名積天之露霜取者消乍

〔萬葉集八〕雜歌內舍人石川朝臣廣成歌二首

妻戀爾鹿鳴山邊之秋芽子者露霜寒盛須疑由君

〔萬葉集十〕雜歌寄露